

NEWSLETTER No.120 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music January 31, 2024

一般社団法人 東洋音楽学会 会報 第120号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail: LEN03210@nifty.com ●ホームページ: http://tog.a.la9.jp

目次

第74回大会レポート	1	第7回 ICTMD 東アジア音楽研究会シンポジウム	
第23回通常理事会・総会議決事項のお知らせ	10	日本開催のお知らせ	13
支部制度の見直しについて	10	RILM(音楽文献目録)委員会からのお知らせ	14
情報委員会からのお知らせ	11	福島和夫氏のご逝去	14
第41回田邊尚雄賞アンケートのお願い	11	会員異動	14
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ	11	図書・資料等の受贈	15
東日本支部からのお知らせ	12	新刊書籍	15
西日本支部からのお知らせ	13	新発売視聴覚資料	17
沖縄支部からのお知らせ	13	編集後記	17
		第12回定時社員総会議事録(抄)・添付書類	18

第74回大会レポート

(2023年11月18日~19日 京都教育大学)

第1日(11月18日)

第1部 京都の六斎念仏公演

主旨説明: 田中多佳子

解説: 福持昌之(非会員・民俗学研究者)

公演: 伏見桃山子ども六斎教室・京都市中堂寺六斎会

公開講演会では、「京都の六斎念仏」という伝統芸能の継承のあり方に焦点が当てられた。はじめに、本大会主催である田中多佳子氏によって講演会の主旨が示された。田中氏によれば、講演会のプログラムを構成するにあたり、小学校の課外活動として地域を超えて継承される伝統と、特定の地域の中で子どもから大人がともに育む伝統との「見比べ」を意識したという。講演の中では《四つ太鼓》など共通する演目が入り入れられ、同じ伝統芸能でありながら異なる持ち味が披露された。

続いて、民俗学研究者であり京都市文化財保護課に勤める福持昌之氏によって「京都の六斎念仏」についての解説が行

われた。福持氏によれば、「六斎念仏」は毎月の特定日を精進潔斎(身心を慎んで仏行に専念)するべき「六斎日」とし、そこで念仏や和讃とともに鉦や太鼓を囃す民俗芸能のことをいう。本来は仏教に由来する行事で念仏を唱えていたが、次第に楽器が加わって芸能化していったと考えられている。「京都の六斎念仏」は、この芸能化が特に発達しており、念仏を唱える古来の様式は「念仏六斎」として区別されるという。

今回の公演では、「京都の六斎念仏」の特徴である各種芸能からの影響を強く確認することができた。「伏見桃山子ども六斎教室」の演奏では30名以上の子どもたちが揃いの法被に身を包み、かけ声とともに緩急ある演奏を披露した。最後に演奏された《越後さらし》は歌舞伎の《越後獅子》から取り



入れられた演目で、鉦や太鼓の音とともに、さらしの布を両手に持った踊り手が華やかに舞った。

子どもたちの演奏を指導したのは「京都中堂寺六齋会」で、江戸後期より京都市下京区中堂寺地区に伝わる六齋念仏を保存している。女性を含む幅広い年齢層で構成されており、講演会の翌日には埼玉の「獅子舞フェスティバル」に出演するなど幅広く活躍している。公演は太鼓芸を中心に構成され、《六段》《すがらき》《石橋》の演奏から始まった。これらの曲には団体の理念である「静・動・楽（農耕社会の祈り・活動・感謝）」が表現されており、中堂寺六齋会の重要曲のひとつであるという。公演の最後には《祇園ばやし》が披露された。これは「函谷鉦」からの抜粋で構成されており、《白山》《唐子》から始まり、《流し》《築紫》へと展開していく。太鼓芸らしく通常よりも早いテンポで演奏され、後半には壬生狂言からの棒振りが登場し、厄除けが祈願されて終曲した。

山内弾正

第2部 研究者・伝承者・教育者の幸せな連携を考える—— 京都の六齋念仏をめぐって——

登壇者：藤田加代（非会員・伏見桃山子ども六齋教室代表
および京都子ども六齋教室連絡会顧問）
福持昌之（非会員・民俗学研究者）

澤田篤子

司会：田中多佳子

今大会のシンポジウムでは、まず、教育者の立場から、京都教育大学附属桃山小学校の児童を対象に「六齋」に取り組んできた同校元教諭・藤田加代さんが実践報告を行った。藤田さんは、民俗芸能を学校教育で扱うには、子供たちに本物の芸を体験させることが効果的で、そのために、外部講師として伝承者を学校に招くことが必要であること、さらに、放課後や休日の自由な練習の効果が大きく、それが「子ども六齋教室」や、寺院での奉納公演に発展していることを報告した。一連の取り組みの効果として、子供の可能性をのばすと同時に、学校との連携が伝承団体の活性化に繋がっていることを結論として報告した。

次に、行政の立場にある京都市の文化財保護技師・福持昌之さんから、無形文化財保護の法律の仕組み、指定の手順などをわかりやすく説明していただいた。何よりも伝承団体側の主体的な取り組みが先ず必要であること、とりわけ、親世代が子供世代にちゃんと教えていない、情報提供が足りない問題が指摘された。また、藤田さんも役立ったと評価した「伝統文化親子教室」の制度の認知が不十分で申請が少なく、活用の余地があることが紹介された。

最後に、研究の立場から、澤田篤子さんは、教育現場では教科書依存が実態で、近年の教科書では「地域で受け継ぐ芸

能」として調べ学習などを推奨しているのは良いが、有名な芸能を例示するのみで、地元の芸能への視点が欠けていることを指摘した。

そして、藤田さんの実践報告を例に、教育者が「本物」を教えることが重要で、それには伝承者の協力と行政の制度的・財政的支援が必要であることを指摘した。その一方で、行政との連携では、文化芸術基本法が「学校・地域の連携」を掲げたことは大きな前進だが、観光の手段となりかねない危惧があることにも言及した。

また、研究者の責務として、教育者の授業実践を研究者が後押しすること、有名無名を問わず、細々とした芸能にも目を向けるべきことを呼びかけた。

金城厚

◇第40回 田邊尚雄賞授賞式

受賞者：早稲田みな子

授賞対象：『アメリカ日系社会の音楽文化—越境者たちの百年史』（共和国、2022年3月20日発行）

田邊尚雄賞授賞式は近藤静乃氏の司会により行われた。授賞対象は早稲田みな子氏の『アメリカ日系社会の音楽文化—越境者たちの百年史』（共和国、2022年）であった。開会宣言ののち、選考委員長の飯野りさ氏により授賞理由が述べられた。授賞理由は会報第118号（2023年5月25日、2-3頁）に掲載されているので、そちらを参照されたい。飯野氏からは授賞理由に引き続き、長くこのテーマに取り組んできた早稲田氏の授賞作は我が国のその他の移民研究にも応用できるものであり、今後の活躍を期待するとの激励が述べられた。審査委員は飯野氏の他、高松晃子、金城厚、千葉優子、野川美穂子の各氏であった。次に会長の小塩さとみ氏より賞状と賞金の授与があった。

授賞作は早稲田氏が2000年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校に提出した博士論文を増補・改訂したものである。早稲田氏による受賞挨拶の中では、単行本としての出版までに20年以上がかかったが、その間アップデートしなければという気持ちになり追跡調査とデータが追加され、まとめるのに苦労したこと、一方で、2000年以降のインターネットの発達により、後追い調査において容易に繋がることができたことなどを述べられたことが印象的であった。授賞作は553頁にもものぼる大作である。大学会館に移動しての祝賀会では、徳丸吉彦氏による祝辞の中で、早稲田氏の描き出したアメリカ日系人が音楽を継承していく様についての深い感動の言葉が述べられた。さらに、早稲田氏の



学友らによる祝辞も述べられ、早稲田氏の学生時代から現在に至るまでの研究への関わりの経緯などを知ることができ、楽しく和やかな中で祝賀会が行われた。

井上さゆり

第2日(11月19日)

◇研究発表A-1(司会:早稲田みな子)

奄美島唄の舞台における歌詞の復権 —1990年代以降の試みを中心に—

発表者: アンニ

本発表は、現代の奄美島唄を対象に、1970年代に始まる「一元化」の流れから転じて1990年代以降の「多様化」の流れを整理するものだった。

1970-80年代の島唄は、コンクールやテレビ番組化という新たな動向に直面し、全国発信を目指す意識下で、いわゆる「日本民謡」の様式に準じるべく島唄様式を変化させた面があった。1990年代以降になると、「歌掛け文化保存会」の実践や若手唄者による「歌遊び」の舞台化を通じて、島唄に本来そなわる歌詞の多様性が重視されるようになった。

質疑では、コンクールの経験を通して島唄が様式的に変化した(変化せざるを得なかった)ことに対する、唄者たちの意識のありように関する質問があった。また、「日本民謡大賞」はテレビ番組のため同番組ディレクターの指示で島唄の様式が変化した可能性、つまり様式変化の一因としてマスコミ力にも注視する必要があるという指摘があった。

三島わかな

三線の二面性とジェンダー —「遊女(ジュリ)」との関係に焦点を当てて—

発表者: 山本佳穂

本発表では、琉球国時代に王府の役人が外交政策の手段として三線を演奏したこと、三線には「男性性」のイメージが付与される一方で、辻遊郭のジュリが奏でた楽器であることから「女性性」のイメージが付与されてきたことを指摘した。発表者は楽器とジェンダーとの関係を探る目的のもと、三線にそなわる二面性に対して「三線を持つ矛盾」とし、本発表では「矛盾」の解決を出発点としてジュリと三線との関係に焦点を当てていた。このように二項対立的にとらえる姿勢について、報告者はいささかの疑問をおぼえた。

質疑では、戦後沖縄に現出した民謡酒場などの演奏空間と女性の関係について調べる必要があるのではないかという指摘があった。また、近世琉球の三線が宮廷芸能のジャンルで用いられただけでなく士族社会の家庭音楽としてたしなまれた楽器だったことの確認ならびに戦前期における本土のレコード制作との関連についての指摘など、その他があった。

三島わかな

芸姐(げいたん)の表演 —1935年臺灣博覧会を中心に—

発表者: 中原逸郎

本発表では、日本統治期の台湾社会に存在した芸姐(日本統治期以前から台湾に存在した芸能者)に着目し、なかでも1935年の「臺灣博覧会」の開催時と開催後の台湾社会における音楽環境の変化について考察することが目的とされた。発表構成は、芸姐の成立と全盛、芸姐の教育、芸姐の芸と音楽、レコード歌手としての芸姐、始政四十周年博覧会の芸姐の表演、植民地政治と博覧会、と多岐にわたる内容だった。発表者は総括として、日本の芸妓と台湾の芸姐が芸や飲墨水制度の点で類似していたこと、台湾風花区は大正期から続くモダニズムの潮流のなかで様相を変え、伝統的芸姐は博覧会開催前に姿を変えていたことを指摘した。

質疑では、従来はさまざまな芸能ジャンルを体得していた芸姐がモダニズムの影響でこれほどまでにガラッと変化した理由についての質問があった。また、芸姐が影絵芝居のような大衆芸能の担い手だったことの背景や影絵芝居のストーリー性についての質問があった。

三島わかな

◇研究発表B-1(司会:配川美加)

新出コレクション西村公一文庫の特徴と可能性

発表者: 竹内有一、神津武男(非会員)

本発表では、大阪府豊中市在住の研究者・コレクターである西村公一氏が収集したコレクション「西村公一文庫」について、まず竹内氏より、その概要および資料の整理分類に至るまでの経緯が説明された。続いて神津氏より、義太夫節の浄瑠璃本を例に、西村公一文庫の資料の特徴が示された。義太夫節浄瑠璃本のうち、通し本と道行揃の所蔵点数は667点で、近畿地方の所蔵機関の中でも5番目に多い数だという。また、通し本や抜き本から新たな情報が得られ、同文庫の資料が研究の進展に大きく寄与することが示唆された。

質疑応答では西村氏の資料収集の方向性について質問があり、竹内氏は関西圏の他のコレクターとの競合を避けながら、日本の伝統音楽や流行歌謡といった幅広いジャンルを集めることになったと回答した。約4000点に及ぶ膨大な数の資料の目録化は長期的なプロジェクトとなるが、資料へのアクセスを心待ちにしている研究者も多いだろう。広く関心を集める本コレクションの整備の、今後の展開に注目したい。

曾村みずき

もうひとつの浄瑠璃文化 —乙女文楽を通してみる—

発表者: 廣井榮子

廣井氏による本研究は、乙女文楽を通して女義太夫(以下、女義)と素人義太夫(以下、素義)とのかかわりを探るもの

である。本発表では、まず乙女文楽の歴史を概観し、先行研究の音楽的記述が限定的である点を指摘した。続いて戦前期の義太夫関係雑誌から乙女文楽関連記事や広告を紹介し、複数の座を対象とした劇評や外地巡業の様子、指導者として文楽座出勤の桐竹門造の名が掲載されたことが示された。そして、とりわけ戦後の情報収集に限られると言及しつつ、今後は戦後に宝塚義太夫歌舞伎研究会等とかがかわった竹本三蝶を中心に、女義・素義の関係を考えたいと結んだ。

フロアからのコメントより、乙女文楽周辺関係者の調査の必要性が再確認されたほか、現在の乙女文楽の伝承状況について補足された。資料的なハードルが高い研究状況がうかがえたが、今後のインタビューを含む調査の蓄積から、女義・素義の実態が戦前から戦後にかけて連続的に解明されることが期待される。

曾村みずき

室町末期『下間少進手沢車屋謡本』におけるツヨ吟とヨワ吟の原型

発表者：丹羽幸江

丹羽氏は、室町末期の金春流謡本『下間少進手沢車屋謡本』のうち五声十二律の記載がある楽曲の分析から、上音・中音と五声とに二種類の対応関係があり、これらは謡伝書『塵芥抄』「呂律の吟」にみられる呂・律の各吟の五声の配列と一致することを、具体的な事例を挙げて提示した。さらに天台宗《六道講式》の重との比較から、音域や初重・二重の旋律型において声明との関連がみられることを指摘した。結びには、室町末期から天和元年(金春流謡本『六徳本』刊行時期)までに、吟の表現が音域等から息抜きの違いへと変化した可能性に言及した。

質疑応答では主に講式との関連について議論され、謡本における五音の羽の音位に関する質問や、講式での旋律型の組み合わせパターンについての情報が寄せられた。また、本発表では対象としなかった真義真言宗の講式の譜本についても調査が必要だとするコメントもあり、調査対象を拡大させた、さらなる検証が期待される。

曾村みずき

◇研究発表C-1(司会：大久保真利子)

「文化芸術資源」の活用のためのアーカイブズ構築 —ケーススタディにみる諸課題と資料活用の可能性—

代表/司会：大久保真利子

発表者：仲辻真帆、濱崎友絵、前川道博(非会員)

本発表では、まず大久保氏が本発表での「アーカイブズ」の語義を「原資料のアーカイブズ(リアルアーカイブズ)とデジタルアーカイブズの双方を含むもの」と定義し、続いて音楽研究、教育、アーカイブズ支援等に携わる研究者4名が報告を行った。

大久保氏は「歴史的音源アーカイブズの現状と課題」と題し、まず最大規模の音源アーカイブズである国会図書館「歴史的音源(れきおん)」について、未登録音源を含めた再点検と拡充が求められている現状を報告した。一方で歴史的音源の所蔵機関はほとんどが所蔵音源の内容を把握して一定程度公開しているにも関わらず利活用者が少なく、原資料の保管に課題があるという。こうした現状を受けて、各所蔵機関を横断する所蔵リストを作成し、幅広い研究への活用を目指す「歴史的音源所蔵機関ネットワーク(レキレコ)」の構築を進めていることが紹介された。

続く濱崎氏は、「記憶の継承と再構成—大学における授業実践から考える—」として、自身の信州大学での授業実践を3件紹介した。とりわけ「松本市 神楽」は、文献・映像・録音資料の活用と、伝承者の協力を得て篠笛習得による体験的な学習を組み合わせた実践例として興味深かった。こうした学習は、学生が伝承者から知識や経験を一方的に学ぶだけでなく、伝承者にとっても積極的な伝承への動機となり得るだろう。

仲辻氏は、自身が東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室で携わる「近代日本の音楽史資料と学校史資料のアーカイブズ」について報告した。特に「作曲委託関係資料」、「信時潔資料」、「木下保資料」などのコレクションは、書類・録音・楽譜といった資料の種別を超えた「群」としての保存により、利活用の幅が広がる(資料が活きる)との指摘には説得力があった。

前川氏は情報学の立場から、「音楽音源デジタルアーカイブ化の形成」について報告した。前川氏の提唱する「分散型デジタルコモンズ」は、デジタルな知識・情報源のコモンズ(共有地)の形成により、音楽音源の様々なリソース(楽譜、音源、映像、文書、ヒアリング、関連記事、楽器・道具等)へのアクセスを容易にし、資料所蔵機関(所蔵者)の「偏在」を超えるという構想であった。

フロアからは、多くの分散型デジタルコモンズが形成されることにより、ほとんどの人が知らない情報が表舞台に出て、これが資料の保存につながるとの意見があった。大久保氏は、デジタルアーカイブ化は意識するしないにかかわらず、深慮する必要があるとして本発表を締め括った。

デジタルアーカイブズについては、積極的な活用が期待される一方で、その訴求力の幅広さと不可逆性を鑑みるならば、想定する利活用者や利活用の目的についての具体的な精査が欠かせない。本発表の事例報告を通じた共通理解と課題共有は、そうした精査過程の公表としても意義があると思われる。

前原恵美

◇研究発表 A-2 (司会：三島わかな)

モザンビークで育まれてきた多文化共生の知恵と対話的音楽創作
発表者：古謝麻耶子

多民族多言語の交錯する国家モザンビークでは、音楽や踊りの中に「『多様な表現』を受け入れる」仕組みがある。伝統的な踊りや音楽のリズムパターンを基調としつつ、西洋楽器など様々な要素を入れる伝統的フュージョンにおいて主体は「個人」であり、会話するかのように音楽が紡がれていく。それは瞬間を生きるというスタイルであり、音楽創作のルールを固定して共有するのではなく常に交渉され更新される。中心は常に移動し、だれもが中心に立て、誰でも入りやすいという平等主義的な側面がそこにある。そして伝統的フュージョンの奏者は自らのルーツとグローバルの両方をみずえている。しかし、「積極的共生」のための枠組みや条件はみつけないものでなく探り続けることに意味がある。伝統的フュージョンは、「最終的に総合的に構築される何か」ではない何度も回帰しながら姿を変え続けるものである。以上の報告に対し、自由な即興が何故可能かという質問があり、ポルトガルは同化政策をとらず、学校教育が普及しなかったことが原因とされた。 馬場雄司

明治期から大正期にかけての日比谷公園奏楽

発表者：丸山彩、橘川亜美 (非会員)

橘川氏の卒業論文に基づき内容を再構成した本発表では、明治 38 年に開始された日比谷公園奏楽のレパートリーについて、陸・海軍軍楽隊や三越少年音楽隊といった演奏の担い手による傾向が明らかにされた。発表において、日比谷公園奏楽で演奏頻度が高かった作曲家や曲目が挙げられるとともに、日比谷公園奏楽が人気を博した背景として、選曲や曲目解説への工夫がなされていたことが音楽雑誌の記事に基づいて述べられた。

フロアからは、曲目解説の具体的な変化、関東大震災の影響、陸・海軍軍楽隊や三越少年音楽隊が日比谷公園奏楽で演奏するまでの過程、演奏者の詳細な所属など、多くの質問が挙がった。

大正末期には衰退の兆しがみられたという日比谷公園奏楽が、昭和期にはどのように変化したのか、さらに他の演奏団体や楽団のレパートリーとはどのように異なるかなど、今後も多方面に調査を広げられる研究だと感じたため、さらなる進展に期待したい。 武田有里

清末期の蕭友梅の音楽認識 — 「音楽概説」(1907)を中心に—
発表者：卓詩穎

卓氏の発表の目的は、中国で西洋音楽の導入に尽力した蕭友梅が日本での留学中にどのような音楽認識であったかを探

るため、蕭が留学中に著した「音楽概説」を明治期の日本の音楽書と比較し、蕭が参考書籍とした音楽書を明らかにすることであった。発表内では、「音楽概説」で用いられている用語や図版が、高井徳造『中等教育教科用楽典』、奥好義『洋琴教則本』、山本正夫『唱歌教授法通論』と共通しており、これらが蕭の参考書籍である可能性が述べられた。質疑応答によれば、蕭は参照した音楽書から必要な情報を選定し、誤謬を直していたという。ただし、山本の著作は「音楽概説」より後に出版された。

本文の詳細な比較は今後進める予定とのことだが、実際に蕭が何を参照したかを立証するためには、他の資料からの裏付けがあるとより説得力が増すのではと考えた。蕭の足跡がどれほど一次資料に残されているかは不明だが、ぜひさらに幅広い資料調査を継続してほしい。

武田有里

◇研究発表 B-2 (司会：前原恵美)

笛の古楽譜にみる「基本旋律」の意識

発表者：根本千聡

発表ではまず、林謙三氏が「博雅笛譜考」(1969)で示した、笛の古楽譜にみる「基本旋律」の概念が紹介された。林氏は古楽譜と現行の楽譜には大きな相違があり、「基本旋律」に諸々の装飾音を加えて演奏がなされていたと考えた。『管眼集』(12~13世紀頃)は『博雅笛譜』(966)と比べると、「基本旋律」を示す大譜字はかなり高い確率で一致する。一致しない場合は、不正確な書写や、複数の異なる演奏伝承が存在していたことが理由として考えられる。また装飾音は小譜字によって示されている。さらに『秘曲譜』(1287)を、『博雅笛譜』『管眼集』と比較した場合、大譜字は依然として大きく一致するが、『註大家龍笛要録譜』(14世紀前半)になると、不一致が目立ち、「基本旋律」から逸脱している。つまり13世紀頃までの笛譜の大譜字は『博雅笛譜』あるいは「譜の証本」の基本旋律を示すが、14世紀頃からの笛譜の大譜字は「基本旋律」ではなく、その笛譜が手本にした笛譜(あるいは演奏伝承)の旋律を示している可能性がある。このことは、基本旋律の観念が薄れたことを示し、琵琶・箏などの弦楽器や笙において、旋律の意識が低下し、リズム楽器や伴奏楽器という認識に変化する契機を作ったのではないかと、発表者は指摘した。質疑応答では、笛の演奏と口頭伝承・楽譜との関係、また「基本旋律」そのものが何を表しているのかについて議論された。 田中有紀

1873年ウィーン万国博覧会における日本の楽器出展について
発表者：倉脇雅子

本発表では、1873年のウィーン万国博覧会における日本の

楽器展示を、『ウィーン万国博覧会公式報告書』(1873)『日本帝國出品目録』(1873)『明治期万国博覧会出品目録』(1997)など、日頃の資料から再検証を行い、本展示の意義について分析を行った。ウィーン博には35か国から53000点が出品され、アジアの国々も参加し(インド・タイ・中国・日本)、展示は26部門(楽器は第15部門)に及んだ。日本は、一年半に満たない短期間で準備したものの、数多くの褒賞を授与され、成功したと言われている。ウィーン博を注視していた研究者も多く、ドイツ語圏の日本音楽研究に対して、新たな知見の提供がなされた。また、万博に出品するという事に関わる「展示」という行為の中で、日本・オーストリア双方で、美術館・博物館の展示・シンポジウムが盛んに行われることとなり、数多くの横断的・縦断的研究を生み出した。さらに、西洋楽器が日本に寄贈されたり、クドリフスキーによるウィーン博を基にした講演集が刊行されるなど、外交や国際交流の新たな潮流を生み出すことになった。質疑応答では、ウィーン博の会場ではどのように楽器の音を聞くことができたのか、展示における楽器分類の根拠、展示された楽器に入らなかったものについて、活発な議論がなされた。

田中有紀

◇研究発表C-2(司会:岡田恵美)

映像発表:日本在住インド系コミュニティの音楽文化—その歴史と動態—

発表者:小日向英俊

本映像発表は、①「日本におけるインド系移民」、②「インド音楽文化を学ぶ日本人」、③「インドの宗教音楽」、④「日本とインドをつなぐ」という4部構成により、インド系移民の歴史と概略、インド系コミュニティの多様な宗教活動と音楽実践の結びつき、インド古典音楽を学ぶ日本人対象の音楽教室や日本人も自由に参加できる音楽イベント等を網羅し、インド系移民の多様な音楽文化を紹介しつつ、「日本における包摂的社会実現の現状と課題を考える契機となること」を目指すものである。発表後の質疑応答では、日本各地で行われている多様な宗教儀礼・音楽イベントでの使用言語や日本人参加者の属性、宗教や地域によって異なるインド音楽文化に対する参加者の興味のあり方や理解の度合いについての質問がなされた。これらについては主催者・関与者・参加者へのインタビューなどが必要になると思われ、「多様なインド系移民コミュニティとホストとなる日本社会が音楽で繋がることのできるのか」という問いの探究とともに今後の研究展開が期待される。

田森雅一

◇研究発表A-3(司会:高松晃子)

ロシアの都市の民俗バラライカの現在—制度の隙間からの出発—

発表者:柚木かおり

柚木氏の発表は、2020~23年度科研費最終年度の成果報告として、これまでの東洋音楽学会報告を踏まえ、本期間にオンラインで行った聞き取りによる証言を引用しながら、既存の諸制度の隙間で奮闘する音楽家に焦点を当てたものであった。ロシアの複雑な社会構造を踏まえて異なる立場の15人の声を届けるという情報量の多さだったが、AI読み上げによりスピーディーに展開していく発表形態は、斬新で洗練されていた。

フロアからの「ロシア研究における本研究の立ち位置」に関する質問には、柚木氏の直接データを取りに行き、且つ相対的に研究する手法は、文献研究を重んじるロシア文学界にも、特定の立場だけを時系列で論じる芸術学にも属しないと応え、氏の研究の独自性とスケールの大きさを窺わせた。また、「学校教育プログラムに伝統バラライカが組み込まれる可能性」、「ポピュラー音楽を演奏するバラライカ奏者」についての質問、「歌が器楽に対し極端に優遇されている」指摘に対し、それぞれの立場が対立する微妙な現状が説明された。

酒井絵美

ジプシー楽団におけるクラリネットの使用—その導入の時代性と地域をめぐって—

発表者:横井雅子

横井氏の発表は、クラリネットがジプシー楽団に採用された経緯を文献・画像資料を使用し探るもので、副題が「その導入の時代性と地域をめぐって」と変更された。宮廷楽団からの影響や、楽器製作者についての言及、初期アンサンブルにはなかった気鳴楽器特有の音質や技巧性といった多岐にわたる考察から、クラリネットがクライアントである貴族たちに好まれ根付いていく様子が描かれた。

フロアからの「ロマが音楽を学ぶプロセス」に関する質問には、地主によって楽器や衣装を買い与えられ、習わされたという記述が残るものの、正規の楽団との接触があったかは不明だと回答した。また、「ウクライナでは盲人奏者が、ロシアでは農奴が音楽を担ったが、ハンガリーにおいてはロマと考えてよいか」という質問には、ハンガリーにはそういった伝統はなく、ジプシー楽団が小編成で雇いやすいこと、定住した直後でロマに職が必要だったことなどの偶然性が重なり楽団が増加したのではないかと述べた。

酒井絵美

博物館の新たな使命から考える楽器博物館の可能性—ユネスコ報告とICOM博物館新定義と浜松市楽器博物館20年の実践から—

発表者:嶋和彦

嶋氏の発表の目的は、元浜松市楽器博物館館長の視点から、世界の博物館の動向や、氏の博物館での実践経験の概要を紹

紹介、これからの日本の博物館のあるべき姿と可能性について問題意識を共有することであった。これは、本大会の公開講演会のタイトルである「研究者・伝承者・教育者の幸せな連携を考える」にも直結する。

満席のフロアでは、これまで博物館と連携を試みてきた研究者を中心に盛んに議論が巻き起こり、博物館と研究者の協働への関心が高いことを示していた。法的な制約や、欧米と日本での学芸員の認識の違いなど、問題点が山積みであることも窺えた。ICOM(国際博物館会議)で採択された、包摂的、多様性、持続可能性、倫理的などの用語が盛り込まれた博物館の新定義を踏まえ、日本の楽器博物館はどう開かれて行くべきか、また、本学会が社会でどうあるべきか、すべての参加者が考える意義深い発表だった。

酒井絵美

◇研究発表 B-3 (司会：山本百合子)

曾志恣の『教育唱歌集』からみる日本の明治期の唱歌の受容

発表者：呂政慧

呂氏は、明治期に早稲田大学と東京音楽学校に留学していた上海人の曾志恣が東京で編纂・印刷し、上海で発売されて当時の中国で広く教科書として使われた『教育唱歌集』の内容を調査、検討している。その成果として、先行研究におけるこれまでの見解とは異なり、『教育唱歌集』掲載の26曲中20曲の唱歌の旋律が、明治期の『小学唱歌集』等の唱歌集から借用されていることが明らかになった。本発表は、調査資料を示しながらその内容を紹介しつつ、曾の日本留学での学びや音楽活動の足取りによってその成果を裏付けするというものであった。今後は中国語でつけられた歌詞の内容についても分析していくということである。中国語の歌詞をつけるにあたって使われた方法も興味深く思われる。フロアでは、まだ明らかになっていない残り6曲の旋律の由来の解明について、また中国での『教育唱歌集』使用対象の校種および中国に帰国後の曾の活動についての調査について、期待が表明された。

盛口和子

岩井智海の仏教唱歌創作について —明治時代における仏教唱歌研究の一例として—

発表者：彭泓

彭氏は、明治初期に現れた仏教唱歌創作の理論のうち「東西折衷」を提唱する一人であった岩井智海に注目し、彼の創作した仏教唱歌の曲調と歌詞の選択の変化について分析・検討をしている。本発表は、岩井に関する3冊の仏教唱歌集や彼の著書である『仏教音楽論』における調査対象資料を示しながら、これまでの研究成果を報告するというものであった。岩井創作の唱歌の曲調を分析した結果から、当初は東西折衷的な旋律が多かったものの、その後雅楽の律旋法によるもの

がメインになっていたという指摘がなされた。それは、東京音楽学校での学習歴をもちバイオリンや声楽の演奏に秀でていたという岩井の、西洋音楽が浸透してきた社会の中での「東西折衷」の捉え方、仏教唱歌創作の意図の背後にある彼の音楽観に迫るものであろう。フロアでの質疑応答では、歌詞内容の選択の分類については、その根拠において再考の必要も指摘された。明治期の西洋音楽受容の新たな側面が明らかになる上でも、さらなる研究の発展が期待される。

盛口和子

「幼稚園教育要領」における「文化や伝統に親しむ」にかかわる保育者の意識 —アンケート調査を通して—

発表者：長谷川真由

平成29(2017)年告示の「幼稚園教育要領」の中に明記された「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」や「わらべうたや我が国の伝統的な遊び」といった文言は、どのように保育者に意識されているのか。本発表は、長谷川氏によって実施された保育者対象の研修の中で実施されたアンケート調査の5年分のデータ、および2023年度に実施されたアンケート調査の分析から、これらの文言の明記による保育者の意識変容への効果を考察したものであった。結果としては、直接保育を担当するクラス担任等の保育者は文言等に対する関心は低い傾向にあったものの、文言の明記は組織として研修制度を意識的に設けるきっかけとなったことが指摘された。フロアでの質疑応答では、様々なメディアから音楽を受容している現在の子どもたちにとって「伝統」とは何なのか、更新されていくものなのか、「自発的に歌う歌」をどのように捉えていくのかといった活発な議論が交わされ、深まりのある時間となった。

盛口和子

◇研究発表 C-3 (司会：劉麟玉)

日本植民地下台湾(1895-1945)における邦楽の演奏空間 —台湾中央研究院地理情報システムセンター(台湾中央研究院人社中心地理資訊科学研究專題中心)との共同研究を通じて—

発表者：劉麟玉、徳丸吉彦、小塩さとみ、福田千絵

日本音楽研究の分野でポスト・コロニアル研究が活発化したのは、2000年前後からだたと記憶する。以来、台湾・朝鮮・満洲など外地での実演や稽古の状況に加えて、レコードや放送の事例を含めた音楽活動の実態が数多く掘り起こされてきた。それによって、国内状況からは見えにくかった往時の日本音楽を取り巻く諸事情が明らかになり、外地の動向を組み込んだ近代日本の音楽研究の必要性が大方の共通認識となるに至っている。

その中で、劉麟玉氏を研究代表者として植民地台湾の事例に取り組んできた小塩さとみ・福田千絵・徳丸吉彦の各氏による本学会大会では二度目の共同発表が行われた。今回の眼目の一つは、長年蓄積してきた台湾の音楽情報に、台湾中央研究院地理情報システムセンターの協力の下に詳細な地理情報を重ね合わせた「台湾における日本の伝統音楽」サイトを公開して研究成果の空間的把握を容易にし、利用上の利便性を高めたことであろう。劉氏の報告では、台湾神社の祭礼での日本人芸者や台湾漢民族による練り歩きルートと舞台での余興演奏の位置関係が大変わかりやすく提示された。小塩氏の報告は、雑誌『台湾邦楽界』『台湾演芸と楽界』等に基づく台湾在住の邦楽師匠の分布を地理情報に重ねたもので、とりわけ台北の各日本人居住区の特性や劇場所在地との関係が非常に明快になった。居住地や稽古場情報を含む典拠資料では、師匠のジャンルはほぼ近世邦楽に限られるようだが、たとえば明治期から各流儀で社中を作った能楽師匠の情報は追加できないのだろうか。福田氏の報告は、台北での邦楽演奏会場の変遷と内地在住の三曲演奏家による台湾演奏旅行と、台湾への移住者が多かった九州出身者の中から熊本より渡台して三曲教授を生業とした船田喜久を取り上げ、その活動状況を空間にこだわって描き出した。最後に徳丸氏が、日本による台湾統治期の植民地政策・文化政策の面から種々の音楽事象を俯瞰し、台湾への教育制度・国家神道の導入や台湾音楽調査・新台湾音楽運動を通して、日本が影響を与えた唱歌・軍歌、西洋音楽、西洋音楽と中国音楽との折衷様式に触れ、当時の全体像を総括して締めくくった。

植民地下の台湾における音楽状況がこうして立体的に明らかになると、改めて思うのは、長く現地に根付き存在感を有していた邦楽の痕跡や影響が、なぜ現在はほとんど見いだせないのかという点である。一義的には、日本の敗戦による植民地の解放と主たる担い手だった邦人の引き揚げが主因なのだろうが、米国の日系移民がもたらした尺八や和太鼓が現在は日系人以外の人々にも享受されている例など、担い手が変わっても存続する外来文化も存在する。台湾に限らず、植民地時代に日本が導入した唱歌や西洋音楽は戦後も影響を残した事例が多いのに対し、戦前に外地で盛行していた邦楽がどのような理由と過程によって痕跡すら失うに至ったのか、今後そのメカニズムにも切り込む必要があるように感じた。

塚原康子

◇研究発表A-4(司会:尾高暁子)

中国古代における甬鐘の発音構造に関する一考察

発表者:長澤文彩

中国の編鐘を構成する鐘のうち、西周時代から存在する甬鐘の発音構造について、器体内面に設けられた「調音溝」に

着目してその役割を解明しようとする発表である。断面がアーモンド型の甬鐘は正面を叩く正鼓音と側面を叩く測鼓音では音高が異なるという双音性を持つ。出土品や博物館所蔵品の鐘を調査・分析した結果、「調音溝」の配置には統一的な規格が見られなかったため、「調音溝」は音高の変化というよりは、打点を決める、あるいは正鼓音と測鼓音の音をはっきりさせる役割を持っていた可能性がある。ただしこのことは測鼓音の実際の使用を裏付けるものではないという結論に達した。

フロアからは、バラバラに出土した鐘をどのように編鐘と認識して音程測定をするのか、出土した鐘に緑青や土がついた状態で正確な音程測定ができるのかなどの質問が出された。

古代楽器の発音構造を解明しようとする興味深い研究であり、さらなる成果が得られることが期待される。

由比邦子

唐詩に見られる箏の受容と演奏実態の考察

発表者:李嬌寒

本発表は、唐代の燕楽の楽器として発展した箏の材質・演奏場面・演奏用語に関する表現を康熙45(1706)年に編纂された『全唐詩』より抽出し、絃の色や箏爪の素材と箏本体の装飾、演奏場面、演奏用語に分類して検討するという内容である。検討の結果、箏は宮廷や貴族の宴会で演奏され、しかも夜の演奏が好まれたこと、そして10種類抽出された演奏用語については、「弾」のみが現在でも使われているが、唐代に特徴的と考えられる奏法もあったことがわかった。

質疑応答では、唐代の箏を調べるのになぜ清代に編纂された『全唐詩』を使用したのか、演奏用語の中には特定の奏法ではなく一般的な演奏を表す語もあるのではないかと、楽譜に書き込まれた奏法の表示と照らし合わせたのか、夜のイメージはどこから来るのか、などの質問が出た。

本発表は唐詩に見られる箏の実態についてであったが、発表タイトルに謳った「箏の受容」についての言及がなかったのが残念である。

由比邦子

ベトナム中部高原におけるゴングの調律技術

発表者:柳沢英輔

ベトナム中部高原のジャライ族のゴング調律プロセスを記録した音響・映像メディアの活用とともに発表者本人の調律体験に基づいて、ゴング調律技法を言語化しようとする試みについての発表である。中部高原を代表する調律師ナイファイ氏は耳のみを頼りに金属ハンマーでゴング両面の調律箇所を打つが、音高・音色といった調律の効果は箇所により異なる。氏の調律プロセスの映像と調律につれて変化するゴング音の周波数の分析により、氏のいう「良い音」が基本周波数

の特定の部分音の割れを一つにしてうなりをなくすことで得られるという結論に至った。調律師の高齢化と減少によるゴング文化衰退の懸念を前提とした研究の一環である。

フロアからは、ゴング調律技法の外部流出の危険性、ゴング調律マニュアルを現地で普及させる可能性、「良い音」の数値化の困難さ、ゴングの材質と調律の関係などの質問・意見が出された。

音現象の感覚的理解を言語化するさらなる挑戦が期待される。
由比邦子

◇研究発表 B-4 (司会：竹内有一)

九学会調査音源資料を活用した三匹獅子舞の再活性化の試み—予備的報告—

発表者：植村幸生

本発表は、1995年に国立民族学博物館に寄贈された下北・利根川・奄美の調査資料(九学会連合、1960~70年代)の「利活用」について、三匹獅子舞を中心に論じるものであった。当該資料を活用して現地で視聴会を行ったところ、現行の芸能との間に興味深い共通点/相違点(テンポや曲目の差異など)がいくつも浮き彫りになったという。質疑応答では、視聴会は全ての事例で行うべきではあるものの、今回のケースのようにうまくいくとは限らないこと、また、資料の公開方法などについて議論された。時間の都合で動画・録音が流されなかったことは残念であったものの、三匹獅子の囃子には同名異曲、異名同曲が実に多く、このような交流が芸能の通時的研究にとって有益であることは、口頭の説明だけでも十分理解することができた。音をたよりにその変遷を辿ることができるかもしれない、さらには、廃絶曲の復曲も促すかもしれない、という魅力的な当該プロジェクトの今後に期待したい。
川崎瑞穂

諏訪地方における御柱祭と木遣り —「関わりの構造」をめぐる—

発表者：濱崎友絵、辻竜平(非会員)、
茅野恒秀(非会員)、相澤真一(非会員)

諏訪を象徴する御柱祭と木遣りを前面に押し出した題目にはいささか大風呂敷の感が否めないものの、内容は実にコンパクトにまとめられており、論点も明確であった。社会学的手法、とりわけアンケートに基づく計量的・数理的アプローチから人々と祭礼との関わりを論じたものであり、多くの興味深い結果が提示された。とりわけ、伝統文化に関わっている人ほど木遣りを歌える割合が高くなるという結果は興味深い。別の習い事との関係、というこの論点は、今後の当該分野の研究においても重要な視座となるかもしれない。質疑応答では、木遣りへの関わり方(参加方法)や、保存会同士の関係について活発な議論が行われた。要旨にもあるように社

会学と音楽学の横断的研究ではあるが、当然民俗学においても先行研究が豊富な事例であるため、将来的には研究結果を接続していく方法も模索すべきだろう。「諏訪学」は蓄積厚く、かつ熱い。御柱祭、木遣りとともに生きる人々の実態に迫った本研究の意義は大きい。
川崎瑞穂

伝承の中断がもたらす経済面への影響 —桂六斎念佛を事例として—

発表者：志川真子

本大会の公開講演会にも関連する「六斎念仏」を研究対象とする本発表は、中断と復活を繰り返してきた当該事例の「経済」を辿る意欲的な研究であった。2020~22年度の出納帳の分析から、中断が伝承に与える経済的影響を考察したものであり、とりわけ支出面の研究という、従来収入に比して注目が少なかった側面に切り込むユニークなアプローチは、2020年からのフィールドワーク、そして演者としての参加という形で復活の過程を観察してきた経験に裏打ちされており、説得力の高い立論であったといえよう。芸能や祭礼は「お金」がかかる。芸能の経済的側面へのアプローチについては、近年の民俗芸能研究においても、いくつかの特筆すべき研究が既に提示されている。しかし、何にどれだけ、どのような理由でお金がかかるのかについて、関連するアクター(伝承者のみならず物も含む)の動きを丁寧に辿りながら描き出した本発表の意義は大きい。今後の更なる研究の進展に期待したい。
川崎瑞穂

◇研究発表 C-4 (司会：山本華子)

「よさこい文化」の幼児音楽教育への導入と展開 —保育現場と養成校の取り組みから—

発表者：山本華子(代表)、壽美玲子、有村さやか

2017(平成29)年に告示された幼稚園教育要領の領域「環境」に日本の地域文化や伝統への親しみを持つことが明記された。本発表は、これに応じようと、「よさこい文化」を幼児音楽教育に取り入れる可能性を保育現場と養成校での実践から検討するものである。発表の冒頭、「よさこい文化」とは、「夜に來い」という意味を持つ「よさこい」に、節、祭り、踊りが付随した文化の総称であり、「あらゆるよさこい系の文化」という意味で使用することが確認された。

壽美氏は、研究対象である高知「よさこい祭り」、札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」、小田原「ODAWARA えっさホイおどり」の、それぞれの成立と特徴を紹介した。1954年、92年、99年に発祥したこれらの祭りでは、《よさこい鳴子踊り》、《ソーラン節》、《おさるのかごや》といった地域に関連する曲の一部を入れた演舞曲と鳴子や猿子の使用を条件に、自由に踊ることができるという。そして、神事に関係せず、まちの活性化を目的に、進化、伝播、継続させる都市の新し

い祭りであるとの見解を示した。

山本氏は、2023年度開催の「高知よさこい祭り」と「YOSAKOIソーラン祭り」に出場した園の保育者へのアンケート結果をもとに、幼児が楽しみながら実践する様子や保育者が取り組む姿などを報告した。続いて有村氏は、「ODAWARA えっさホイおどり」を体験した小田原短期大学の学生へのアンケートやインタビューを通して、ボランティア活動、ゼミナール活動、地域連携活動といった授業を機に演舞を習い祭りに参加したことにより、地域との関わりや保育現場での実践に必要な学びが得られ、将来、保育者として幼児のより豊かな表現活動を目指すことに結び付くと期待を寄せた。

また、山本氏と有村氏はともに、幼稚園教育要領の5領域と幼児の終わりまでに育てほしい10の姿に繋がる効果が得られたと分析し、領域「表現」に関わる回答が多かったと伝えている。中でも平成10年告示版の「表現」から示されるようになった幼児の自己表現の欲求を大切にするとの内容に対し、山本氏は、子どもの表現の展開に重きを置いた際の「よさこい文化」の実践には検討の余地があると言及した。

発表後は、学生の演舞の習得時間と祭りへの参加の経緯、地域の伝統に対する教員の評価と課題意識、大人の「よさこい文化」の中での幼児の位置、祭りに参加する保育者の意義などが質疑に挙がり、歌うことも授業実践にどの提案もあったが、通底するのは「よさこい文化」、取り組んだ幼児、学生それぞれの音楽性への問いだったと思われる。踊る一体感や祭りに参加した達成感が得られたことを収穫とするような、学生と一緒に踊ったエピソードも交えた回答は魅力的ながら、音楽性はどのように検討されていくだろうか。

今後は幼児が日常で行う「よさこい文化」にも目を向けたらという。継続的な実践と進展に期待する。

鯨井正子

第23回通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2023年10月8日(日)に、東京学芸大学小金井キャンパス西2号館1階フォノテークおよびweb会議システムZoomを用いて第23回通常理事会が開催されました。主な議決事項をお知らせいたします。

1) 新入会員について

前回理事会(2023年4月2日)以降に申し込みのあった正会員9名の入会が正式に承認されました。

2) 参事の委嘱、解嘱について

小島冨月氏への本部(総務・田邊賞担当)参事の委嘱、李

嫣寒氏への東日本支部参事の委嘱、増田久未氏の東日本支部参事の解嘱が承認されました。

3) 定款施行細則変更について

定款施行細則第13条の変更が承認されました。詳しくは総会[添付資料5]をご覧ください。

4) ICTMDの日本名について

本学会が日本国内委員会として加盟しているICTM(International Council for Traditional Music)がICTMD(International Council for Traditional Music and Dance)に名称変更されたこととともない、日本名を「国際伝統音楽学会」から「国際伝統音楽舞踊学会」に変更することになりました。

支部制度の見直しについて

一般社団法人への移行(2012年)に伴う公益目的支出計画が2021年8月31日に完了したことをうけ、前期理事会から学会の会員減少に見合った制度のあり方の検討をはじめました。前期理事会では将来構想委員会を設置し、直面する様々な課題の洗い出しを行いました。今期の理事会ではその中から支部制度の見直しの検討を行っています。

1936年に設立した本学会は、同年10月に第1回の例会(本部例会)を開催し、1960年には関西支部第1回例会、1990年には沖縄支部第1回例会を開催しました。こうした本部例会、関西支部例会、沖縄支部例会の三つの例会の体制をうけて、例会のさらなる充実を企図して2002年に現行の3支部(東・西・沖縄)の制度が成立しました。当時の会員数は700名を超えていました。3支部体制は各支部内の多彩な地域で対面例会を行うために設けられた制度でしたが、当初の意図に反して実際の例会開催地は、西日本支部は関西、東日本支部は東京周辺にほぼ限られています。また、ここ数年はオンライン例会の充実により、例会の開催の仕方も大きく様変わりしております。

こうした状況を踏まえて、現在理事会では例会のあり方を抜本的に見直し、例会の企画立案を「例会委員会」(仮称)に一任化する案を検討しています。本学会の支部は対面例会を開催するための制度という本来の主旨に鑑みて、オンライン例会とのバランスを考えつつ、全国の対面例会を希望する地域から柔軟に参画できる仕組みを検討中です。その際に現行の定款施行細則第1条は変更することになります。

まだ検討を始めた段階ですので、会員の皆様の忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。ご質問やご意見のある方は、学会事務所(LEN03210@nifty.com)までお知らせください。

情報委員会からのお知らせ

現在、本学会では最新のメールアドレスの登録をお願いしております。会員への連絡・案内を郵送のみに頼る現状を改善し、電子メールによるより細やかで速やかな連絡・案内を実現するためです。すでに多くのメールアドレスに、会報などのデジタル版および研究集会などの学術情報を配信しておりますが、さらに多くの方からの「メールアドレス登録+郵送停止」を募っております。「東洋音楽学会会員名簿情報等登録フォーム」でご登録ください。

なお住所変更などの会員情報の変更も、この登録フォームから行えます。学会トップページより、「会員の皆様へ」とお進みの上ログインしてください。



上記フォームにアクセスするためのIDとパスワードは、会報第119号(全会員へ郵送)3頁に記載しています。また、ログインに関するお問い合わせは情報委員会(togictmt@gmail.com)へ、または学会事務局(LEN03210@nifty.com)までお送り下さい。

なお、郵送停止希望を出されているにもかかわらず本号が郵送された会員の方は、メール配信に問題が生じている可能性があります。情報委員会へお問い合わせください。

また会員相互の情報交換MLについても、運用を検討中です。

第41回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第41回田邊尚雄賞選考委員会では、新刊情報を広く収集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、著作物を出版される際は、選考委員会までお早めにお知らせ下さい。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象：2023年1月1日～12月31日の発行物

締め切り：2024年2月2日(金)正午

記入事項：著者名、書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、掲載誌名・巻次・編集者名・論文頁数も記して下さい。推薦理由を簡潔にお書き添えていただいても構いません。

▶送付先：東洋音楽学会 第41回田邊尚雄賞選考委員会
(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号
(Fax) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

※ご連絡の受け取り確認などは遅れる可能性もあります。

選考委員：金城厚(委員長)、千葉優子、野川美穂子、海野るみ、田中有紀

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ

1. 会費納入のお願い

2023年9月から新しい年度(2023年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払ください。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号] 00160-6-55723 [加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名] 〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)
[当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済でも会費が納入できます。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧ください。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ(<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーが、また研究生

の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

1. 「東日本支部だより」郵送停止のお知らせ

「東日本支部だより」は、第63号(2023年11月発行)より、紙媒体の印刷・郵送を停止し、学会ウェブサイトから配信するのみとなりました。学会ウェブサイトより閲覧し、必要に応じてダウンロード、印刷を行ってください。最新号の発行は、学会メーリングリスト(ML)で告知し、URLを送信します。学会MLに参加していない方は、以下QRコード、あるいはURLから登録フォームにアクセスし、メールアドレスを登録してください。



URL: <https://qr.paps.jp/19Xb>

「東日本支部だより」の郵送継続を希望される場合は、支部事務局(tog.higashi@gmail.com)に直接ご連絡ください。上記フォームで「郵送継続を希望する」にチェックを入れた場合も、必ず支部事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

2. 定例研究会のお知らせ

東日本支部では、2024年2月3日(土)に、第137回定例研究会をオンライン会議システムのZoomを使用して開催いたします。参加は事前申込制です。東日本支部のウェブサイト(<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>)より、2024年1月30日(火)までにお申し込みください。申し込み締め切り後、例会前日までにミーティングコード等をお送りいたします。なお、本例会は当日に発表、質疑応答ともに行います。※初めてZoom例会に参加される方へ:参加にはWebカメラ

とマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォンなどが必要となります。

第137回 定例研究会(オンライン開催)

2024年2月3日(土) 14:00~16:30(予定) ※最新情報は、学会HPをご覧ください

研究発表

- 1) 薩摩琵琶・錦心流のレパートリーとその変遷 曾村みずき(京都市立芸術大学)
 - 2) 日本近世中期の知識人による「楽」の歴史研究の諸相 中川優子(東京藝術大学大学院)
- 参加申込締切: 2024年1月30日(火)

3. 定例研究会発表募集(7月例会)について

東日本支部では、2024年7月6日(土)の定例研究会(開催方式未定)における発表を募集しています。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、E-mail)を明記の上、2024年4月20日(土)までに、東日本支部事務局にメール(tog.higashi@gmail.com)でお申し込みください。

なお、発表希望をご提出後1週間経っても支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

4. 例会の参加申込について

例会の最新情報、及び「参加申込フォーム」は、支部のウェブサイトに掲載されます。ウェブサイトで情報をチェックし、早めにお申し込みください。

5. 「会員の声」投稿募集

東日本支部発行「東日本支部だより」には、会員の皆様から寄せられた情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あてお知らせください。投稿方法は、以下の通りです。

- 1) 次号締切: 2024年2月10日(土)(3月上旬発行予定の「支部だより」に掲載します)
- 2) 原稿の送り先: 東日本支部事務局 tog.higashi@gmail.com
- 3) 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)
- 4) 内容:
 - ① 催し物、出版物などの情報
 研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会など

② 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

- * 原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任ください。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。ご了承ください。

西日本支部からのお知らせ

◇定例研究会

徐々に対面を復活させますが、オンライン併用を可能な限り続けることにします。今度の日程は、第298回定例研究会(大阪大学)となっております。詳しい内容を随時、ウェブサイトにあげます。ご確認ください。

例会での発表を希望される方は、西日本支部事務局(支部長個人)あてに電子メールでお申し込みください。返信がない場合、繰り返し督促してください。

◇支部だよりについて

西日本支部が刊行する『西日本支部だより』は97号をもって、紙媒体の『西日本支部だより』を廃止しました。98号から、支部委員を中心に、リレーエッセイを掲載中です。98号(2023年1月刊行)には福岡まどか氏、99号(2023年5月刊行)には竹内直氏、そして最新号は100号(2023年10月刊行)には島添貴美子氏の研究エッセイが掲載されています。ご一読いただければ幸いです。

(西日本支部事務局) 住所と電話番号がかわりました。

〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

藤田隆則研究室気付

電話/Fax. 075-585-2119

電子メール(藤田隆則): tfujita@kcua.ac.jp

沖縄支部からのお知らせ

沖縄支部 第81回定例研究会のご案内

日時: 2024年2月18日(日)午後

開催方法: オンライン会議システム Zoom

登壇者: 渡久地 圭(ビューロー・ダンケ代表、フルート奏者)

浜田 理恵(オペラ歌手、新国立劇場オペラ研修所

ヴォーカルテクニカルコーチ)

企画・聞き手: 三島 わかな(沖縄支部)

下記の内容について、登壇者と聞き手との鼎談を行います。日時、参加方法など、詳細は学会沖縄支部ウェブサイトでご覧いただけます。奮ってご参加ください。

「演奏家と母語 ～日本語を母語とするクラシック音楽演奏家がめざす21世紀の地平～」

明治政府の政策として西洋音楽を導入し、その後、さまざまな受容を経て、一世紀半ばかりの年月が流れようとしています。わたしたち日本人が西洋音楽を実践することは、21世紀を迎えた現在、あらたな局面に入っているように感じられます。なぜなら西洋音楽が世界を席卷し、非欧米人も西洋音楽を実践することが当たり前状況にあつて、そういった文化状況の意義を問い直し、実践することの意味を捉えなおす時期が来ていると考えるからです。つまり、非欧米人が西洋音楽と向き合うなかで、これからは「みずからの西洋音楽」としての自覚のもとで、みずからの身体性や言語的な特色を客観的にとらえつつ、そこにアイデンティティを重ねていくことが大事なのではないか...と考えるからです。

そこで本定例研究会では、欧米諸国の言語(同一言語でも地域差含む)の相違ごとに、その数だけ音楽作品のあり方も多様であるという認識をふまえつつ、今一度、諸言語の音韻的観点から個々の音楽作品を分析的にとらえなおし、再現することの意義について考えたいと思います。

第7回 ICTMD 東アジア音楽研究会シンポジウム日本開催のお知らせ

ICTMD 東アジア音楽研究会(Study Group on Musics of East Asia =MEA)の第7回シンポジウムが2024年の夏に日本で開催されます。

日程: 2024年8月23日～25日

開催地: 国立民族学博物館

本大会は、国立民族学博物館と東洋音楽学会の共催により行われます。詳細は追ってお知らせいたします。

発表申込はすでに締め切られましたが、参加申込は学会ウェブサイト内の特設ページ(<http://tog.a.la9.jp/news/mea202408.html>)より、2月初旬から開始予定です。奮ってご参加ください。

現地大会実行委員(Local Arrangement Committee 敬称略、五十音順): 小塩さとみ、マツト・ギラン、福岡正太、

福岡まどか、劉麟玉、早稲田みな子

RILM (音楽文献目録) 委員会からのお知らせ

◇『音楽文献目録オンライン』の状況

『音楽文献目録オンライン』では、既刊の『音楽文献目録』45号(2016年7月から2017年6月までの文献を掲載)以降の文献をWebで公開中です。47号以降、事務局に情報が届いた文献については、2023年3月に選定された分までの文献が公開されています。それ以降の文献も、順次公開される予定です。今後、44号以前の遡及入力も進め、会員の皆様には過去の目録も含めて検索・閲覧できるようになります。

また、『音楽文献目録オンライン』上の広告は2022年4月1日から開始し、現在2件掲載していますが、広告枠にはまだ余裕があり引き続き募集(5000円〜)しています。なお、冊子体による遡及入力のための基金を募集しており、昨年度、当学会からも3万円の寄付をいただきました。今年度も同額の寄付をいただくことになっています。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

◇東洋音楽学会会員の『音楽文献目録オンライン』へのアクセス

本学会HPに表示される「音楽文献目録オンライン」をクリックした後、下記のIDとパスワードを入力してアクセスしてください。

機密のため削除

福島和夫氏のご逝去

飯島一彦

上野学園日本音楽史研究所長であり、長年日本音楽史研究に携わり、東洋音楽学会の運営にも一時期理事として深く関わった福島和夫氏が、2023年8月19日に逝去された。享年93歳であった。

葬儀はご家族のみの密葬で行われ、訃報は広くは報じられなかったため、まだご存じのない方も多岐かもしれない。また、より若い世代の会員は福島和夫という名前は実体が見えない存在で、実感のないことかもしれない。が、氏はまさに日本音楽史研究の中心に居続けた人であった。

ここ数年は足が弱られたこともあり、研究所に顔を出す機会も以前に比べれば減っていたが、2022年7月には和泉書院より『歴史学としての日本音楽史研究』(日本史研究叢刊42)

を出版し、その書評が東洋音楽研究第88号に根本千聡氏によって掲載されるなど、日本音楽史研究者として最後まで一線に居られたのは間違いない。

同書は、いわば上野学園日本音楽史研究所をハブとする日本音楽史研究圏の広がりや現状を如実に見せる研究書である。同研究所は日本音楽史研究を目指す者にとってはメッカであり、梁山泊の活気を呈していた場所であった。筆者も大学院生時代、日本音楽史研究所の前身であった日本音楽資料室に通ってから45年以上が経ち、現在でも特別研究員として末席を汚している。振り返れば福島氏は、真摯に日本音楽史研究に向かい合う研究者に対しては老若を問わずその温顔で向かい合わせた。その志の深さに思いをいたす。

日本音楽史研究所は2022年に研究員新井弘順氏を失った。そしてその翌年福島和夫所長を失った。その意味をあらためて考えつつ、正しく日本音楽史研究が興隆していくのを願ってやまない。それが福島和夫氏の願いでもあることは間違いないことである。

会員異動

個人情報のため削除

個人情報のため削除

図書・資料等の受贈

(2023年9月～11月、到着順)

『日本伝統音楽研究』第20号

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

『楽道』9,10,11月号

(公財)正派邦楽会

『音楽学』第69巻1号

日本音楽学会

『日本音楽学会会報』第119号

日本音楽学会

『新内節旋律集——富士松加賀太夫・吾妻路宮古太夫 演奏における旋律型、《明烏》《蘭蝶》《三勝》《累》《赤坂並木》の楽曲分析、浄瑠璃の作曲法を探る——』

林一行 デザインエッグ社

『一音成佛』第52号

虚無僧研究会

『民俗芸能研究』第74号

民俗芸能学会

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)、価格(税込)

『アートベース・リサーチの可能性——制作・研究・教育をつなぐ』 小松佳代子(編)、勁草書房、4,950円

『アジアの中の伊勢神宮——アニミズム系文化圏の日本』

工藤隆、三弥井書店、3,080円

『アニメ・エコロジー——テレビ、アニメーション、ゲームの系譜学』

トーマス・ラマール(著)、上野俊哉(監)、大崎晴美(訳)、名古屋大学出版会、6,930円

『阿仏の文(乳母の文・庭の訓)注釈』

田淵句美子(著)、米田有里(著)ほか、青簡舎、8,360円

『アメリカ聖公会の歴史』

ロバート・W. プリチャード(著)、西原廉太(監訳)、中原康貴(訳)、教文館、5,720円

『異文化へのアプローチ——文化人類学入門』

中生勝美(著)、北樹出版、2,090円

『エディンバラ賛歌——大学・教会・街に満ちる音楽(桜美林大学叢書)』 横山正子、桜美林大学出版会、2,750円

『お伽草子・中世神話と韓国シャーマンの神歌』

金賛會(著)、三弥井書店、7,480円

『オペラ大図鑑』アラン・ライディング、レスリー・ダントン=ダウナー、加藤浩子(監)ほか、河出書房新社、16,390円

『音楽教程』

ボエティウス、伊藤友計(訳)、講談社、1,496円

『音楽(小学館の図鑑NEO)』

池辺晋一郎(監)、茂手木潔子(監修協力・執筆)ほか、小学館、2640円

『音楽情報処理(メディアテクノロジーシリーズ2)』

後藤真孝(編著)、北原鉄朗(共著)ほか、コロナ社、3,960円

『音楽大学・高校 学校案内2024——国公立大・私大・短大・高校・大学院・音楽学校』

音楽之友社(編)、音楽之友社、3,960円

『音楽の人類史 発展と伝播の8億年の物語』

マイケル・スピッツァー、竹田円(訳)、原書房、5,500円

『女舞の伝統——日本舞踊成立史の研究(桜美林大学叢書)』

丸茂美恵子(著)、桜美林大学出版会、4,180円

『金子みすゞ・矢崎節夫の詩による新しい童謡曲集——わたしと小鳥とすずと(斉唱・合唱)』

弓削田健介、ことりゆきほか、教育芸術出版、3,080円

『ガムラン入門——インドネシアのジャワガムランと舞踊(東京音楽大学付属民族音楽研究所講座)』

東京音楽大学付属民族音楽研究所(編)ほか、スタイルノート、3,300円

『カンティエーガス・デ・サンタ・マリアへの誘い——聖母マリア頌歌集』

浅香武和(編著)、浅野ひとみほか、論創社、3,080円

『近代日本におけるシャンハイ・イメージ1931～1945』

徐青、国際書院、6,600円

『「グリーン・ハウス」があった街——メディア文化の街はど

こへ向かうのか』 仲川秀樹、学文社、3,630円
 『古楽夜話——古楽を楽しむための60のエピソード』
 那須田務、音楽之友社、2,530円
 『澤田柳吉——日本初のショパン弾き』
 多田純一、春秋社、4,950円
 『知っておきたい歌舞伎日本舞踊名曲——〇〇選』
 松本幸四郎(監)、淡交社、3,080円
 『質の認識としての音楽科カリキュラム——デュイの芸術哲学を基に』
 西園芳信、風間書房、5,500円
 『修験道の文化史(論集修験道の歴史3)』
 川崎剛志(編)、時枝務(編)ほか、岩田書院、6,160円
 『障害の家と自由な身体——リハビリとアートを巡る7つの対話』
 大崎晴地(編著)、晶文社、2,970円
 『人種差別の習慣——人種化された身体の実現象学』
 ヘレン・ゴゴ、小手川正二郎(訳)ほか、青土社、3,080円
 『神聖な言葉の世界——現代北米先住民文学の「夜明け」』
 横田由理、音羽書房鶴見書店、4,180円
 『スポーツの日本史——遊戯・芸能・武術(歴史文化ライブラリー580)』
 谷釜尋徳、吉川弘文館、1,870円
 『戦時下の演劇——国策劇・外地・収容所』
 神山彰(編)、森話社、5,060円
 『早歌とは何か——能に影響を与えた歌謡』
 外村南都子、三弥井書店、9,350円
 『中国の死神』 大谷亨(著)、青弓社、2,860円
 『ツタンカーメン王墓出土の楽器——エジプト学と音楽学のはざままで』
 野中亜紀、みらい、3,300円
 『抵抗のブルターニュ——言葉と文化を守った人々の闘い』
 大場静枝、小鳥遊書房、4,620円
 『トモちゃんの子どもと音楽から学んだ授業づくり(教育音楽ハンドブック)』 岩井智宏、音楽之友社、1,980円
 『ナラティブと情動——身体に根差した会話をとめて』
 小森康永、D. デンボロウほか、北大路書房、3,520円
 『ニジンスキー——踊る神と呼ばれた男』
 鈴木晶、みすず書房、5,720円
 『日本と東アジアの〈環境文学〉』
 小峯和明(編)、勉誠社、16,500円
 『日本民俗学の萌芽と生成——近世から明治まで』
 板橋春夫、七月社、5,940円
 『パーソンセンタード・アプローチとオープンダイアローグ——対話・つながり・共に生きる』
 本山智敬(編)、永野浩二(編)ほか、遠見書房、3,080円
 『「ピアノを弾く少女」の誕生——ジェンダーと近代日本の音楽文化史』
 玉川裕子、青土社、2,640円
 『比較文学で読む十一の出会い——交差する東西のまなざし』
 英米文化学会(編)、勉誠社、3,080円

『東アジア祭祀芸能比較論』 田仲一成、知泉書館、6,600円
 『東アジアの王宮・王都と仏教』
 堀裕(編)、三上喜孝(編)ほか、勉誠社、13,200円
 『ビジュアル日本の音楽の歴史③近代～現代』
 徳丸吉彦(監・著)、塚原康子、ゆまに書房、3,808円
 『表現の文化研究——鶴見俊輔・フォークソング運動・大阪万博』
 粟谷佳司、新曜社、3,410円
 『巫・占の異相——東アジアにおける巫・占術の多角的研究』
 吉村美香(編)、小南一郎(著)ほか、志学社、3,960円
 『フルトヴェングラーが岩倉具視を連れて来た』
 シュミット村木眞寿美、音楽之友社、3,300円
 『フレーヴォ、カポエイラ、パッソ——ブラジル、ペルナンブーコの民衆芸能研究』
 ヴァウデマール・ヂ・オリヴェイラ(著)、
 神戸周(訳)、溪水社、4,290円
 『まるごと1冊スペイン音楽の本』
 下山静香、アルテスパブリッシング、4,180円
 『万葉集と帝國的想像』
 トークイル・ダシー(著)、品田悦一(訳)、
 北村礼子(訳)、花鳥社、12,100円
 『無声映画入門——調査、研究、キュレーターシップ』
 パオロ・ケルキ・ウザイ、石原香絵(訳)、
 美学出版、5,280円
 『明治の「新しい女」——佐々城豊寿と娘・信子』
 小檜山ルイ、勁草書房、5,500円
 『メディアと若者文化』
 加藤裕康(編著)、小寺敦之(著)、
 山内萌(著)ほか、新泉社、2,750円
 『メディア論の冒険者たち』
 伊藤守(編)、東京大学出版会、4,620円
 『もときわめる! 1曲1冊シリーズ ⑤ J.S.バッハ:《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》(ON BOOKS advance)』
 那須田務、音楽之友社、1,320円
 『もときわめる! 1曲1冊シリーズ ⑥ フォーレ:《レクイエム》(ON BOOKS advance)』 相場ひろ、音楽之友社、1,320円
 『物語と催馬楽・風俗歌——うつほ物語から源氏物語へ(新典社研究叢書367)』
 山崎薫、新典社、10,120円
 『社のオーケストラ——仙台フィル50年の物語』
 須永誠、音楽之友社、2,420円
 『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない——思考と実践のフィールドから』
 広瀬浩二郎(著)、三元社、2,860円
 『夢と生きる——バンドマンの社会学』
 野村駿、岩波書店、2,860円
 『落語がつくる〈江戸東京〉』 田中優子、岩波書店、2,750円
 『琉球諸島の歴史人類学——信仰と習俗の民族誌』

青山優太郎、六一書房、3,850円

『理論家に学ぶ16世紀の演奏法』

アン・スミス(著)、菅沼起一(訳)、

坂本龍右(訳)、音楽之友社、6,600円

『ロベール・ルパージュとケベック—舞台表象に見る国際性と地域性』
神崎舞、彩流社、4,400円

新発売視聴覚資料

『黒潮節／伊野福の神音頭／野母ちゅうろう～文書き～／川良山節』

全日本民謡指導者連盟(監)、COCJ-42125、2,200円

『源氏物語の音楽～光源氏の舞と音世界～』

小島美子、野川美穂子ほか、COCJ-42136-40、11,000円

『小学生のためのクラス合唱新曲集 ぼくの風船(New Song ライブラリー同声編5)』
GES-16004、3,080円

『中学生のための新しい教材集 タイムリーパー』

田中エミ、前田勝則ほか GES-16023、1,980円

『中島勝祐創作賞 第十二回 牛窓詩抄』

砂崎知子、中島勝祐、VZCG-850、3,300円

『ふる里の民謡 第63集』

小野花子、谷島明世ほか、KIBM-5010、7,590円

編集後記

1月号をお送りします。毎年大会の報告記事を掲載する1月号は、多くのレポート執筆者の方のご協力によってはじめて成り立っています。今号も充実した内容になりました。お忙しい中、執筆をお引き受けくださった皆様に、この場を借りて心からの感謝の意を表したいと思います。なお今号より追悼文記事に関しては、執筆者のお名前を冒頭に掲載する方式に変更いたしましたのでご了承ください。

増野亜子

編集委員会

理事：増野亜子、土田牧子

委員：山本華子

参事：井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、

西浦まどか、吉岡倫裕

第12回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1.日時: 令和5年11月18日(土) 17:40-18:30

2.場所: 国立大学法人 京都教育大学講堂

3.出席者: 324名(委任状提出者128名、書面議決書提出者142名を含む)

〔備考〕正会員527名、定足数264名

4.議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により小塩さとみ会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、田中有紀・永原恵三両氏が選出された後、以下の議事を開始した。第1号議案から第3号議案の採決は、岡崎淑子監事による「監査報告書」〔添付書類8〕の説明の後に行われた。

第1号議案 令和4年(2022年)度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)より「令和4年(2022年)度事業報告」〔添付書類1-1〕「処務の概要」〔添付書類1-2〕について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 令和4年(2022年)度収支決算の件

高松晃子理事(経理担当)より「令和4年(2022年)度収支計算書」〔添付書類2-1〕と「収支計算書内訳表」〔添付書類2-2〕について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 令和5年(2023年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

高松晃子理事(経理担当)により「貸借対照表」〔添付書類3-1〕、「貸借対照表内訳表」〔添付書類3-2〕、「正味財産増減計算書」〔添付書類3-3〕について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 令和5年(2023年)8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事(総務担当)より「会員の異動状況(2022年9月1日~2023年8月31日)」〔添付書類4〕について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 定款施行細則第13条変更の件

遠藤徹理事(総務担当)より、「定款施行細則第13条変更の件」〔添付資料5〕について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

審議終了後、遠藤徹理事が「令和5年度(2023年度)事業計画」〔添付書類6〕について、次いで高松晃子理事が「令和5年度(2023年度)事業計画収支予算書」〔添付書類7〕について、それぞれ報告を行った。また報告事項のその他として、遠藤徹理事(総務担当)より支部制度の見直しについて理事会で検討をはじめた旨の報告があった。

※「令和5年(2023年)度事業計画の件」〔添付書類6〕、「令和5年(2023年)度収支予算の件」〔添付書類7〕については、『会報』第118号(2023年5月25日発行)11~14ページの「第22回通常理事会 添付書類」、支部制度の見直しについては本号の「支部制度の見直しについて」をご覧ください。

【第12回総会 添付資料1-1】

令和4年度(2022年度)事業報告

(自令和4年(2022年)9月1日至令和5年(2023年)8月31日)

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2022年11月12日
- ・会場 国際基督教大学(及びZoom配信)
- ・課題 「日本のオルガン音楽」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2022年11月13日
- ・会場 国際基督教大学(及びZoom配信)
- ・発表件数 21件(共同発表を含む)

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2023年11月
- ・会場 京都教育大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第130回～第135回12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 大正大学、東京大学駒場キャンパス、オンライン開催
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 4回(第293回～第296回12・2・3・7月)
- ・会場 京都市立芸術大学、九州大学総合研究博物館、オンライン開催
- ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 2回(第79回～第80回3・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 研究発表ほか

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第88号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第116号(2022年9月)、第117号(2023年1月)、第118号(2023年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、
図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第60号(2022年11月)、第61号(2023年1月)、第62号(2023年5月)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

- ・第97号(2022年10月)、第98号(2023年1月)、第99号(2023年5月)
- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』(Webのみで公開)

- ・第47号(2023年3月)、第48号(2023年8月)

〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7)日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8)音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(9)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10)東洋学・アジア研究連絡協議会への参加

○会員一名を委員として派遣

〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(12)「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

○第39回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2022年11月12日
- ・受賞者および受賞対象

佐本英規『森の中のレコーディング・スタジオ—混淆する民族音楽と周縁からのグローバル化—』

2021年2月15日発行、京都：昭和堂、ISBN 978-4-8122-2010-8

○第40回田邊尚雄賞の選考と発表

- ・受賞者および受賞対象

早稲田みな子『アメリカ日系社会の音楽文化—越境者たちの百年史』

2022年3月20日発行、共和国、ISBN978-4-907986-71-1

〔5〕研究および調査(定款第5条5)

(13)国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔6〕その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

(14)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(15)独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

(16)「人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の遂行

【第12回総会 添付資料1-2】

2. 処務の概要

〔1〕役員等に関する事項

2022年度(令和4年度)末現在

職名	勤務	氏名	任期(開始)	担当職務	報酬	所属など
理事	非常勤	小塩 さとみ	2022/11/12	会長、総務 ※会長就任日は11/13	なし	宮城教育大学
理事	非常勤	遠藤 徹	2022/11/12	副会長、総務	なし	東京学芸大学
理事	非常勤	早稲田 みな子	2022/11/12	東日本支部長	なし	国立音楽大学
理事	非常勤	藤田 隆則	2022/11/12	西日本支部長	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	小西 潤子	2022/11/12	沖縄支部長	なし	沖縄県立芸術大学
理事	非常勤	梅田 英春	2022/11/12	機関誌	なし	静岡文化芸術大学
理事	非常勤	小日向 英俊	2022/11/12	常務、総務	なし	東京音楽大学
理事	非常勤	近藤 静乃 (本姓 青木)	2022/11/12	常務、総務	なし	東京藝術大学
理事	非常勤	高松 晃子 (本姓 南)	2022/11/12	常務、経理	なし	聖徳大学
理事	非常勤	竹内 有一	2022/11/12	機関誌、西日本支部担当	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	土田 牧子	2022/11/12	広報	なし	共立女子大学
理事	非常勤	配川 美加	2022/11/12	常務、経理	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	福岡 まどか	2022/11/12	機関誌、西日本支部担当	なし	大阪大学
理事	非常勤	増野 亜子 (本姓 城島)	2022/11/12	常務、総務、広報	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	横井 雅子 (本姓 片岡)	2022/11/12	東日本支部担当	なし	国立音楽大学
監事	非常勤	岡崎 淑子	2022/11/12	監査	なし	聖心女子大学名誉教授
監事	非常勤	澤田 篤子	2022/11/12	監査	なし	大阪教育大学名誉教授

支部委員 [東日本支部] 金光真理子、鯨井正子、鈴木良枝、田辺沙保里、仲辻真帆、濱崎友絵、
福田千絵、伏木香織、ヘルマン・ゴチェフスキ(～2023年8月)、前島美保、森田都紀
[西日本支部] 大久保真利子、岡田恵美、神野知恵、齋藤桂、島添貴美子、竹内直
[沖縄支部] 高瀬澄子、塚原健太、三島わかかな

参事 [本部] 青木慧、井上環、今泉佳奈、神田花菜子、小林美季子、岸美咲、
倉地真梨(2023年4月～)、齋藤穂歌、長澤文彩、西浦まどか、根本千聡、
淵上ラファエル広志、松村麻由、吉岡倫裕
[東日本支部] 岩崎愛、小尾淳、神村かおり、澤田聖也、清水(松浦)春菜(2023年
4月～)、武田有里、長谷川由依、増田久未、村治学、山内弾正
[西日本支部] 細野桜子、吉岡倫裕
[沖縄支部] 小川恵祐、多和田真理

〔2〕職員に関する事項

2022年度(令和4年度)末現在

職名	氏名	採用年月日	担当事務	手当	交通費	備考
職員	金子由美子	1997/10/22	事務一般	月額80,000円	実費支給	

〔3〕会議等に関する事項

【第12回総会 添付資料2-1】

一般社団法人東洋音楽学会

収 支 計 算 書

令和4年9月1日から令和5年8月31日まで

(単位：円)

科 目	年度予算額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	500	88	412	
基本財産利息収入	500	88	412	
特定資産運用収入	100	5,837	△ 5,737	
特定資産利息収入	100	5,837	△ 5,737	
入会金収入	0	0	0	
会費収入	4,090,000	4,332,000	△ 242,000	
正会員会費収入	3,800,000	4,062,000	△ 262,000	
賛助会員会費収入	150,000	150,000	0	
特別会員会費収入	140,000	120,000	20,000	
事業収入	1,265,000	1,090,000	175,000	
機関誌発行収入	350,000	318,000	32,000	
大会広告料収入	385,000	365,000	20,000	
大会参加費収入	360,000	389,000	△ 29,000	
懇親会費収入	120,000	0	120,000	
食料費収入	50,000	18,000	32,000	
その他事業収入	0	0	0	
補助金等収入	0	0	0	
負担金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
雑収入	0	843	△ 843	
受取利息収入	0	12	△ 12	
雑収入	0	831	△ 831	
他会計振替額	1,230,000	703,123	526,877	
本部会計振替収入	1,230,000	487,144	742,856	
大会会計振替収入	0	215,979	△ 215,979	
東日本支部会計振替収入	0	0	0	
西日本支部会計振替収入	0	0	0	
沖縄支部会計振替収入	0	0	0	
事業活動収入計	6,585,600	6,131,891	453,709	
2. 事業活動支出				
事業費支出	6,677,000	4,973,406	1,703,594	
給料手当支出	1,200,000	1,120,000	80,000	
臨時雇賃金支出	280,000	124,992	155,008	
法定福利厚生費支出	5,000	4,258	742	
旅費交通費支出	317,000	191,394	125,606	
通信運搬費支出	847,000	602,973	244,027	
消耗什器備品費支出	0	0	0	
消耗品費支出	66,000	15,292	50,708	
賃借料支出	820,000	819,051	949	
印刷製本費支出	729,000	609,782	119,218	
諸謝金支出	310,000	199,500	110,500	
租税公課支出	10,000	11,050	△ 1,050	
負担金支出	172,000	172,000	0	
会議費支出	31,000	12,685	18,315	
広報普及費支出	400,000	357,404	42,596	
田邊尚雄賞関連費支出	150,000	116,002	33,998	
会場運営費支出	145,000	0	145,000	
機関誌作成費支出	800,000	484,997	315,003	
例会運営費支出	140,000	26,510	113,490	
懇親会費支出	120,000	0	120,000	
保険料支出	0	0	0	
事務委託費支出	0	0	0	
食料費支出(雑支出①)	50,000	41,500	8,500	

一般社団法人東洋音楽学会

(単位:円)

科 目	年度予算額	決算額	差異	備考
慶弔費支出(雑支出②)	20,000	3,410	16,590	
手数料支出(雑支出③)	29,000	19,691	9,309	
雑支出(雑支出④)	36,000	40,915	△ 4,915	
管理費支出	550,000	528,000	22,000	
事務委託費支出	550,000	528,000	22,000	
他会計振替額	1,230,000	703,123	526,877	
本部会計振替額	0	215,979	△ 215,979	
大会会計振替額	200,000	0	200,000	
東日本支部会計振替額	560,000	421,008	138,992	
西日本支部会計振替額	400,000	43,826	356,174	
沖縄支部会計振替額	70,000	22,310	47,690	
事業活動支出計	8,457,000	6,204,529	2,252,471	
法人税等の支払額	0	0	0	
事業活動収支差額	△ 1,871,400	△ 72,638	△ 1,798,762	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
基本財産取崩収入	0	0	0	
特定基金取崩収入	1,890,000	150,000	1,740,000	
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
研究推進事業基金取崩収入	1,740,000	0	1,740,000	
固定資産売却収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
敷金・保証金戻収入	0	0	0	
投資活動収入計	1,890,000	150,000	1,740,000	
2. 投資活動支出				
基本財産取得支出	0	0	0	
特定資産取得支出	0	0	0	
固定資産取得支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
敷金・保証金支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	1,890,000	150,000	1,740,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
借入金収入	0	0	0	
基金受入収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
借入金返済支出	0	0	0	
基金返還支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
予備費支出	△ 18,600	0	△ 18,600	
当期収支差額	0	77,362	△ 77,362	
前期繰越収支差額	0	2,208,888	△ 2,208,888	
次期繰越収支差額	0	2,286,250	△ 2,286,250	

【第12回総会 添付資料2-2】

一般社団法人東洋音楽学会

収支計算書内訳表

令和4年9月1日から令和5年8月31日まで

(単位:円)

勘定科目	本部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合計
I 事業活動収支の部							
1. 事業活動収入							
基本財産運用収入	88	0	0	0	0	0	88
基本財産利息収入	88	0	0	0	0	0	88
特定資産運用収入	5,837	0	0	0	0	0	5,837
特定資産利息収入	5,837	0	0	0	0	0	5,837
入会金収入	0	0	0	0	0	0	0
会費収入	4,332,000	0	0	0	0	0	4,332,000
正会員会費収入	4,062,000	0	0	0	0	0	4,062,000
賛助会員会費収入	150,000	0	0	0	0	0	150,000
特別会員会費収入	120,000	0	0	0	0	0	120,000
事業収入	318,000	772,000	0	0	0	0	1,090,000
機関誌発行収入	318,000	0	0	0	0	0	318,000
大会広告料収入	0	365,000	0	0	0	0	365,000
大会参加費収入	0	389,000	0	0	0	0	389,000
懇親会費収入	0	0	0	0	0	0	0
食料費収入	0	18,000	0	0	0	0	18,000
その他事業収入	0	0	0	0	0	0	0
補助金等収入	0	0	0	0	0	0	0
負担金収入	0	0	0	0	0	0	0
寄付金収入	0	0	0	0	0	0	0
寄付金収入	0	0	0	0	0	0	0
雑収入	233	606	2	2	0	0	843
受取利息収入	8	0	2	2	0	0	12
雑収入	225	606	0	0	0	0	831
他会計振替額	215,979	0	421,008	43,826	22,310	△ 703,123	0
本部会計振替収入	0	0	421,008	43,826	22,310	△ 487,144	0
大会会計振替収入	215,979	0	0	0	0	△ 215,979	0
東日本支部会計振替収入	0	0	0	0	0	0	0
西日本支部会計振替収入	0	0	0	0	0	0	0
沖縄支部会計振替収入	0	0	0	0	0	0	0
事業活動収入計	4,872,137	772,606	421,010	43,828	22,310	△ 703,123	5,428,768
2. 事業活動支出							
事業費支出	3,894,664	556,627	393,249	99,763	29,103	0	4,973,406
給料手当支出	1,120,000	0	0	0	0	0	1,120,000
臨時雇賃金支出	0	114,400	10,592	0	0	0	124,992
法定福利厚生費支出	4,258	0	0	0	0	0	4,258
旅費交通費支出	179,044	9,550	0	2,800	0	0	191,394
通信運搬費支出	361,244	21,565	181,132	38,150	882	0	602,973
消耗什器備品費支出	0	0	0	0	0	0	0
消耗品費支出	14,676	0	396	0	220	0	15,292
貸借料支出	819,051	0	0	0	0	0	819,051
印刷製本費支出	192,357	158,026	200,964	58,065	370	0	609,782
諸謝金支出	0	199,500	0	0	0	0	199,500
租税公課支出	11,050	0	0	0	0	0	11,050
負担金支出	172,000	0	0	0	0	0	172,000
会議費支出	11,564	0	0	0	1,121	0	12,685
広報普及費支出	357,404	0	0	0	0	0	357,404
田邊尚雄賞関連費支出	116,002	0	0	0	0	0	116,002
会場運営費支出	0	0	0	0	0	0	0
機関誌作成費支出	484,997	0	0	0	0	0	484,997
例会運営費支出	0	0	0	0	26,510	0	26,510
懇親会費支出	0	0	0	0	0	0	0
保険料支出	0	0	0	0	0	0	0
事務委託費支出	0	0	0	0	0	0	0
食料費支出(雑支出①)	0	41,500	0	0	0	0	41,500
慶弔費支出(雑支出②)	3,410	0	0	0	0	0	3,410
手数料支出(雑支出③)	17,607	1,171	165	748	0	0	19,691
雑支出(雑支出④)	30,000	10,915	0	0	0	0	40,915
管理費支出	528,000	0	0	0	0	0	528,000
事務委託費支出	528,000	0	0	0	0	0	528,000
他会計振替額	487,144	215,979	0	0	0	△ 703,123	0
本部会計振替額	0	215,979	0	0	0	△ 215,979	0
大会会計振替額	0	0	0	0	0	0	0
東日本支部会計振替額	421,008	0	0	0	0	△ 421,008	0
西日本支部会計振替額	43,826	0	0	0	0	△ 43,826	0
沖縄支部会計振替額	22,310	0	0	0	0	△ 22,310	0
事業活動支出計	4,909,808	772,606	393,249	99,763	29,103	△ 703,123	5,501,406
法人税等の支払額	0	0	0	0	0	0	0
事業活動収支差額	△ 37,671	0	27,761	△ 55,935	△ 6,793	0	△ 72,638
II 投資活動収支の部							
1. 投資活動収入							
基本財産取崩収入	0	0	0	0	0	0	0
特定基金取崩収入	150,000	0	0	0	0	0	150,000
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	0	0	0	0	0	150,000
研究推進事業基金取崩収入	0	0	0	0	0	0	0
固定資産売却収入	0	0	0	0	0	0	0
投資有価証券売却収入	0	0	0	0	0	0	0
敷金・保証金戻収入	0	0	0	0	0	0	0
投資活動収入計	150,000	0	0	0	0	0	150,000
2. 投資活動支出							
基本財産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
特定資産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
固定資産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
投資有価証券取得支出	0	0	0	0	0	0	0
敷金・保証金支出	0	0	0	0	0	0	0
投資活動支出計	0	0	0	0	0	0	0
投資活動収支差額	150,000	0	0	0	0	0	150,000
III 財務活動収支の部							
1. 財務活動収入							
借入金収入	0	0	0	0	0	0	0
基金受入収入	0	0	0	0	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0	0	0	0	0
2. 財務活動支出							
借入金返済支出	0	0	0	0	0	0	0
基金返還支出	0	0	0	0	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0	0	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0	0	0	0	0
IV 予備費支出							
予備費支出	0	0	0	0	0	0	0
当期収支差額	112,329	0	27,761	△ 55,935	△ 6,793	0	77,362
前期繰越収支差額	1,666,032	0	138,992	356,174	47,690	0	2,208,888
次期繰越収支差額	1,778,361	0	166,753	300,239	40,897	0	2,286,250

【第12回総会 添付資料3-1】

一般社団法人東洋音楽学会
(様式1-1)

貸借対照表

令和5年8月31日現在

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	2,311,867	2,394,064	△ 82,197
未収金	642,000	324,000	318,000
前渡金	200,000	206,500	△ 6,500
仮払金	0	11,006	△ 11,006
流動資産合計	3,153,867	2,935,570	218,297
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
研究推進事業基金	6,946,000	6,946,000	0
田邊尚雄賞基金	720,000	870,000	△ 150,000
特定資産合計	7,666,000	7,816,000	△ 150,000
(3) その他固定資産			
什器備品	7	7	0
書籍	363,500	363,500	0
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	2,000	2,000	0
その他の固定資産合計	665,507	665,507	0
固定資産合計	13,531,507	13,681,507	△ 150,000
資産合計	16,685,374	16,617,077	68,297
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	383,365	212,150	171,215
預り金	12,252	12,252	0
前受金	472,000	502,280	△ 30,280
流動負債合計	867,617	726,682	140,935
2. 固定負債			
固定負債合計	0	0	0
負債合計	867,617	726,682	140,935
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	0	0	0
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
その他一般正味財産	15,817,757	15,890,395	△ 72,638
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(7,666,000)	(7,816,000)	(△ 150,000)
一般正味財産	15,817,757	15,890,395	△ 72,638
正味財産合計	15,817,757	15,890,395	△ 72,638
負債及び正味財産合計	16,685,374	16,617,077	68,297

注記

当学会は実施事業資産として下記のを有している。

書籍 価額 363,500円

【第12回総会 添付資料3-2】

一般社団法人東洋音楽学会
(様式1-3)

貸借対照表内訳表

令和5年8月31日現在

(単位:円)

勘定科目	本部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合計
I 資産の部							
1. 流動資産							
現金預金	1,603,978	200,000	166,753	300,239	40,897	0	2,311,867
未収金	642,000	0	0	0	0	0	642,000
前渡金	200,000	0	0	0	0	△ 200,000	0
仮払金	0	0	0	0	0	0	0
流動資産合計	2,445,978	200,000	166,753	300,239	40,897	△ 200,000	2,953,867
2. 固定資産							
(1) 基本財産							
定期預金	5,200,000	0	0	0	0	0	5,200,000
基本財産合計	5,200,000	0	0	0	0	0	5,200,000
(2) 特定資産							
研究推進事業基金	6,946,000	0	0	0	0	0	6,946,000
田邊尚雄賞基金	720,000	0	0	0	0	0	720,000
特定資産合計	7,666,000	0	0	0	0	0	7,666,000
(3) その他固定資産							
什器備品	7	0	0	0	0	0	7
書籍	363,500	0	0	0	0	0	363,500
差入敷金	300,000	0	0	0	0	0	300,000
電話加入権	2,000	0	0	0	0	0	2,000
その他の固定資産合計	665,507	0	0	0	0	0	665,507
固定資産合計	13,531,507	0	0	0	0	0	13,531,507
資産合計	15,977,485	200,000	166,753	300,239	40,897	△ 200,000	16,485,374
II 負債の部							
1. 流動負債							
未払金	383,365	0	0	0	0	0	383,365
預り金	12,252	0	0	0	0	0	12,252
前受金	272,000	200,000	0	0	0	△ 200,000	272,000
流動負債合計	667,617	200,000	0	0	0	△ 200,000	667,617
2. 固定負債							
固定負債合計	0	0	0	0	0	0	0
負債合計	667,617	200,000	0	0	0	△ 200,000	667,617
III 正味財産の部							
1. 指定正味財産	0	0	0	0	0	0	0
指定正味財産合計	0	0	0	0	0	0	0
2. 一般正味財産							
その他一般正味財産	15,309,868	0	166,753	300,239	40,897	0	15,817,757
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5,200,000)
(うち特定資産への充当額)	(7,666,000)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(7,666,000)
一般正味財産	15,309,868	0	166,753	300,239	40,897	0	15,817,757
正味財産合計	15,309,868	0	166,753	300,239	40,897	0	15,817,757
負債及び正味財産合計	15,977,485	200,000	166,753	300,239	40,897	△ 200,000	16,485,374

【第12回総会 添付資料3-3】

一般社団法人東洋音楽学会
(様式2-1)

正味財産増減計算書

令和4年9月1日から令和5年8月31日まで

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 経常収支の部			
(1) 事業活動収入			
基本財産運用収入	88	170	△ 82
基本財産受取利息	88	170	△ 82
特定資産運用益	5,837	57,658	△ 51,821
特定資産受取利息	5,837	57,658	△ 51,821
会費収入	4,332,000	4,501,000	△ 169,000
正会員受取会費	4,062,000	4,211,000	△ 149,000
賛助会員受取会費	150,000	150,000	0
特別会員受取会費	120,000	140,000	△ 20,000
事業収入	1,090,000	1,131,500	△ 41,500
機関誌発行収入	318,000	324,000	△ 6,000
大会広告料収入	365,000	380,000	△ 15,000
大会参加費収入	389,000	427,500	△ 38,500
懇親会費収入	0	0	0
食料費収入	18,000	0	18,000
その他事業収入	0	0	0
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
雑収入	843	346	497
受取利息	12	19	△ 7
雑収入	831	327	504
他会計振替額	703,123	998,219	△ 295,096
本部会計振替額	487,144	682,990	△ 195,846
大会会計振替額	215,979	315,229	△ 99,250
東日本支部会計振替額	0	0	0
西日本支部会計振替額	0	0	0
沖縄支部会計振替額	0	0	0
経常収益計	6,131,891	6,688,893	△ 557,002
(2) 事業活動支出			
事業費	4,973,406	4,941,006	32,400
給料手当	1,120,000	1,126,665	△ 6,665
臨時雇賃金	124,992	42,000	82,992
法定福利厚生費	4,258	4,049	209
旅費交通費	191,394	163,026	28,368
通信運搬費	602,973	880,002	△ 277,029
消耗品什器備品費	0	0	0
消耗品費	15,292	15,690	△ 398
賃借料	819,051	761,506	57,545
印刷製本費	609,782	505,342	104,440
諸謝金	199,500	70,000	129,500
租税公課	11,050	600	10,450
支払負担金	172,000	172,000	0
会議費	12,685	1,023	11,662
広報普及費	357,404	357,206	198
減価償却費	0	0	0
田邊尚雄賞関連費	116,002	154,123	△ 38,121
会場運営費	0	0	0
機関誌作成費	484,997	616,668	△ 131,671
例会運営費	26,510	2,200	24,310
懇親会費	0	0	0
保険料	0	0	0

一般社団法人東洋音楽学会

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
事務委託費	0	0	0
食料費(雑費①)	41,500	0	41,500
慶弔費(雑費②)	3,410	29,920	△ 26,510
手数料(雑費③)	19,691	21,805	△ 2,114
雑費(雑費④)	40,915	17,181	23,734
管理費	528,000	550,000	△ 22,000
事務委託費	528,000	550,000	△ 22,000
他会計振替額	703,123	998,219	△ 295,096
本部会計振替額	215,979	315,229	△ 99,250
大会会計振替額	0	0	0
東日本支部会計振替額	421,008	450,277	△ 29,269
西日本支部会計振替額	43,826	227,016	△ 183,190
沖縄支部会計振替額	22,310	5,697	16,613
経常費用計	6,204,529	6,489,225	△ 284,696
評価損益調整前経常増減額	△ 72,638	199,668	△ 272,306
基本財産評価損益等	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 72,638	199,668	△ 272,306
2. 経常外収支の部			
(1) 経常外収益			
固定資産売却益	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
固定資産売却損	0	0	0
固定資産除却損	0	2,000	△ 2,000
固定資産減損損失	0	0	0
経常外費用計	0	2,000	△ 2,000
当期経常外増減額	0	△ 2,000	2,000
当期一般正味財産増減額	△ 72,638	197,668	△ 270,306
一般正味財産増減額	△ 72,638	197,668	△ 270,306
一般正味財産期首残高	15,890,395	15,692,727	197,668
一般正味財産期末残高	15,817,757	15,890,395	△ 72,638
II 指定正味財産増減の部			
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高			
正味財産期末残高	15,817,757	15,890,395	△ 72,638

【第12回総会 添付資料4】

会員の異動状況 (2022年9月1日～2023年8月31日)

(令和4年) (令和5年)

●：東日本支部、◆：西日本支部、■：沖縄支部、#：海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2022.9.1	2023.8.31		
正会員	544	531	-13	新入+13、学生より+4、退会-27、逝去-3
学生会員	10	8	-2	新入+4、正会員へ-4、退会-2
賛助会員	3	3	0	
特別会員	6	6	0	
名誉会員	3	2	-1	逝去-1
	566	550	-16	

個人情報のため削除

【第12回総会 添付資料5】

定款施行細則第 13 条変更の件

現行定款施行細則	変更案
<p>第 13 条 理事および監事の選出に際して、選挙管理委員会は選挙用会員名簿を配布する。</p> <p>2 選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載し、支部ごとに 50 音順に配列する。</p> <p>3 定款に定めるところの役員を連続して 2 期務めた正会員については、次の 1 期に限ってその被選挙権を停止する。選挙管理委員会は、前項の規定にもかかわらず、本項の規定に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の停止を明示する。</p> <p>4 定款に定めるところの役員を通算して 8 期以上務めた正会員は、選挙の度ごとに本人の希望によりその 1 期に限っての被選挙権を休止することができる。この希望は書面で選挙管理委員会に申し出ることとし、選挙管理委員会は、前々項の規定にもかかわらず、この申し出に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の休止を明示する。</p> <p>(以下略)</p>	<p>第 13 条 理事および監事の選出に際して、選挙管理委員会は選挙用会員名簿を配布する。</p> <p>2 選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載し、支部ごとに 50 音順に配列する。</p> <p>3 定款に定めるところの役員を連続して 2 期務めた正会員については、次の 1 期に限ってその被選挙権を停止する。<u>監事を通算して 2 期務めた正会員については、監事の被選挙権を停止する。</u>選挙管理委員会は、前項の規定にもかかわらず、本項の規定に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の停止を明示する。</p> <p>4 定款に定めるところの役員を通算して 8 期以上務めた正会員は、選挙の度ごとに本人の希望によりその 1 期に限って<u>その理事の</u>被選挙権を休止することができる。この希望は書面で選挙管理委員会に申し出ることとし、選挙管理委員会は、前々項の規定にもかかわらず、この申し出に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の休止を明示する。</p> <p>(以下略)</p>

【第12回総会 添付資料8】


監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長 小塩 さとみ 殿

令和5年9月27日

(2023年)

監事 澤田 美子 

監事 岡崎 淑子 

私たちはそれぞれ、令和4年9月1日から令和5年8月31日までの令和4年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 令和4年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上